



福岡県 北九州市立門司海青小学校

ICTを全教科で導入し、
学習意欲や活用力を大幅に向上

北九州市立門司海青小学校は、5年前から教科学習におけるICT機器の効果的な活用について研究している。目的に応じて機器を使い分け、子どもの対話を促し、学習内容への理解を深め、学力向上に結び付けている。

◎ 1995(平成7)年、旧錦町小学校と旧丸山小学校が統合して創立。校区は門司港、関門橋を望む門司港レトロ地区の中心地にある。2015年11月10日、公開研究会を実施。

校長 松本喜義先生

児童数 296人 学級数 12学級

住所 〒801-0833

福岡県北九州市門司区清滝5-3-21

電話 093-331-1708

URL <http://www.kita9.ed.jp/mojikaisei-e/>



そのものを大きく変え、新しい学びを生み出せるものだという意識へと変化していきました」(松本校長)

同校がICT機器の活用によって目指すのは、「分かる授業」を通して、より高い次元での理解を得ることだ。更にタブレット端末導入後は、思考力や表現力を伸ばし、学習意欲を引き出すことも目指し、授業の中での「対話」を重視している(図)。

「分かる授業」づくりで
より高い次元の理解を目指す

北九州市立門司海青小学校では、2009年度末、北九州市から研究指定を受けて電子黒板が設置されたのを機に、ICT機器を本格的に活用し始めた。2014年7月にはタブレット端末40台が配備されて、授業でのICT機器の活用が大きく広がった。松本喜義校長は次のように説明する。

「現行学習指導要領の完全実施により、学習内容が大幅に増えたため、授業の効率化と分かる授業の推進がより一層求められています。そこで、ICT機器を効果的なツールとして積極的に活用してきました」

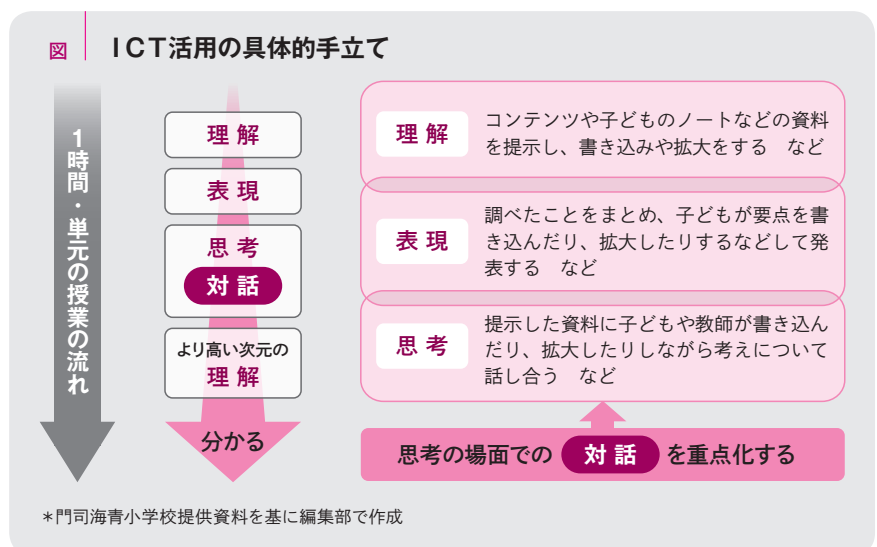
同校では、研究主任と各学年の担当による推進委員会を設置。先進校を視察して事例を研究し、それらを踏まえて研修を行うことで、ICT機

器を活用した授業はどのようなものか、イメージを膨らませていった。

「当初はICT機器が授業に役立つのか、懐疑的な意見が目立ちました。しかし、実践する中で子どもたちの変化を感じるにつれ、ICT機器は従来の教材の『代用』ではなく、授業

タブレットを協働・個別学習に、
電子黒板を一斉学習に活用

電子黒板は学習コンテンツや子どものノートの提示など一斉学習で活用し、タブレット端末は考えの可視化や対話の支援など協働学習や個別



学習の場面で活用することが多い。

「ICT機器では、次の画面に移ると前の学習の内容が見えなくなることがあります。そのため、あくまでもメインは黒板とし、ICT機器は子どもの学習を支援する教具と位置付けて併用しています。ICT機器をどこで使うと効果的か、教員の授業構成力が問われるのです」と、主幹教諭の池崎一彦先生は語る。

電子黒板は主に写真や映像を提示し、前時の振り返りや本時の見通しをもたせることに活用している。電子黒板の利点は、子どもの興味・関心を引きやすいことだ。従来は、「教科書の〇ページを見てください」といった教員の指示を聞き逃したり、該当箇所を見つけられなかったりして授業に付いていけない子どもがいた。電子黒板では、注目させたい箇所を拡大したりマークしたり出来るため、子どもが見逃すことがない。更に、子ども全員が前を向くため、教員の説明に自然と耳を傾ける姿勢になり、集中力も高まる。

「本校に赴任して初めて授業を見学した時、学級全員が食い入るように電子黒板に注目して集中する姿に、とても驚きました」(松本校長)

タブレット端末では、ベネッセの学習用ソフト「ミライシード」の「ムーブノート」(P.9参照)を活用している。その1つが、子どもの考えを可視化する学習活動だ。例えば、図画工作の授業では、子どもが絵画の中で印象に残った箇所に印を付け、全員で共有し、理由を説明し合った。その後、教員が絵画の見方を説明し、美術作品への理解を深めた。また、社会科の工場見学では、自分たちが撮った写真を分類して、マーキングを施して、授業で発表・共有した。

「ムーブノートは、情報の蓄積や学習状況の把握が容易に出来ます。子

どもたちの考えが一斉に分かる、手を挙げられない子どもでも意見を出しやすく誰もが主役になれる、といったメリットがあります」(池崎先生)

体育では動画機能が活躍している。表現活動の授業では、練習の様子を撮影した動画を見ながら改善方法話し合い、発表時には見せ場を動画で説明した後に演技を披露した。また、逆上がりが苦手な子どもが自分の姿を撮影した動画を見て、出来る人との違いに気付き、逆上がりが出来るようになった。その他、スピーチの様子を撮影してアドバイスし合ったり、理科の実験データを蓄積して共有し合ったりもしている(写真)。

タブレット端末は、個別学習でも活用している。例えば、ミライシードに搭載された計算や漢字のドリル機能に夢中になる子どもは多いという。

「ミライシードでは漢字の書き順も即座に正誤判定されるので、またやりたいという意欲につながるようです。紙でやりとりをするタイムラグがなく、教員がマンツーマンで指導するようなものなので、知識の習得・定着に役立っています」(池崎先生)

活用問題の正答率が大幅にアップ

ICT機器導入後、子どもの学力に変化が表れている。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、電子黒板導入後、正答率が大幅に上がり、特にB(活用)問題での正答率の伸びが顕著だった。

「成績下位層の子どもの学力が、大きく底上げされていました。これまで授業に消極的だった子どもが、ICT機器の活用により、授業に集中し、積極的に学び合うようになった結果だと思います」(松本校長)

以前は、記述式問題は空欄で提出する子どもが目立った。しかし、今は



写真 図工の授業でもタブレットのカメラ機能を活用。実技教科でもICTは大活躍している。

全体的に記述量が増え、児童対象のアンケートでも、思考したり協働したり表現したりすることが「出来ている」と答える子どもが増えている。

一方、課題も見えてきた。教員の負担増に配慮した、計画的なICT活用研修の実施や、校内のどこでもタブレット端末を使えるような無線LAN環境の整備などがそれだ。

現在、ICT機器は全教科で活用され、教員はそれぞれ得意教科を中心に、子どもの学びを深められる新たな活用法に積極的にチャレンジしている。11月には研究発表会を行い、今後は未来のタブレット端末の可能性について探っていく予定だ。

「これからは、1人でコツコツと研究するよりも、皆で協働しながら大きなものをつくり出していく時代です。授業を通して豊かな対話の経験を重ね、他者と協働しながら自分の良さを発揮できる子どもを育てていきたいと思います」(松本校長)



北九州市立
門司海青小学校校長

松本喜義

まつもと・きよし

「知育・徳育・体育・安全の4つの花を咲かせようと、笑顔で子どもたちに語り掛ける」



北九州市立
門司海青小学校

池崎一彦

いけざき・かずひこ

主幹教諭。「子どもを1人の『人』として尊重し、言葉遣いをはじめ、常に丁寧に接する」